

第三部 討論



蔡源林氏

【竹内整二】 李先生から、日本の注連のお話がありましたので、それに関して、少しご質問したいと思います。

日本の場合、注連は、注連縄しめなわというかたちで、ある神聖な場所を囲う、神聖な場所をつくるいとなみとして、現在も残っています。普通の家でも新年には注連縄を飾って、その場所に災害が及ばないようにと願います。このように、日本の注連には、災害を避けるという考えはあるのですが、その解除というところまではいきません。

李先生のご報告で私が特に興味深くうかがったのは、道教にもとづいた解除法は、かなり積極的に、人間の主体的な力によるも

司会 蔡源林

台湾国立政治大学教授

のとして儀式化されているということです。そのことの背景にある、宗教的な力やほたらきというものは、道教において、いかなるものとして捉えられているのかをお聴かせくださいますでしょうか。

【フロア】 今回の会議は「死生学」がテーマなのですが、ここまでは「死」の話ばかりで、「生」に関する話がほとんどなかったように思います。このままでは、「死生学」を議論するには不完全なのではないかと思っています。

また、中国では、「良い死に方よりも悪い生の方がいい（死に方が良からうが、悪くても生きている方がまし）」という言い方がありまして、死というものは非常に重いものであるということも言えるかと思っています。死にも様々なあり方があって、非常に苦しい死に方、本人にはまったく苦しみというものが無い死に方、それから現世にまだ非常に気がかりなことが残っている死に方などもある。そういう中で、私たちはどういう死に方を選ぶべきなのか。そういうことも討論しなければならないのかと思います。

【エリック・シッケタンツ（東京大学大学院生）】 私は近代と現代における仏教にとっても関心を持っていますので、これらの時代に関して、李先生に質問させていただきたいと思います。

ごく簡単な質問なのですが、解除の儀礼は、現在の台湾社会の中で、実際にはどの程度行われているのでしょうか。また、近代化の過程で、二十世紀中に、解除が行われる頻度・程度に、何か変化が見られたのかどうかというのが、一つ目の質問です。

二つ目には、李先生はおそらく解除という儀礼の連続性を主張されていると思うのですが、台湾は日本の統治下、植民地であったという経験を持っています。日本の統治体制の下では、喪葬儀礼の改革もはかられまし

た。それによって、何らかの影響が見られたかどうかというのが、二つ目の質問です。

【池澤優】 あまり専門的な質問はしない方がいいかとは思ったのですが、私はついこの間、張勳燎の道教に関する論文（張勳燎・白彬『中国道教考古』、線装書局、二〇〇六）を読みまして、そこに書いてあったことに關して、李先生にお伺いしたいことがあります。

一つは、張勳燎の言っている「初期天師道」という考え方を、全面的にお認めになるのかどうかということです。つまり、二世紀の解注器の背景に、全国的な道教教団があったという説を認めるのかどうか。

二点目は、もしその場合、劉屹（『敬天與崇道』、中華書局、二〇〇五）がまったく違う説を出していますので、劉屹の説についてどうお考えになりますか。

専門的な質問で申し訳ないのですが、お聞きしたいと思います。

【李豊楙】 最初に、三つ目の問題から始めたいと思います。私は、張勳燎先生がおっしゃっている二世紀の「道中人」というものが、初期天師道の人であるという説には、あまり賛成いたしません。劉屹先生の説というのはよく分からないのですが、これが初期天師道であるという言い方には、ちょっと賛成しかねます。ですが、少なくとも初期の道教派であったということは言えるのではないのでしょうか。と言いますのは、まったく組織性が無かったとは言えず、そこには数多く、互いに共通性のある文物が出てきており、その間に組織的な伝播というものが無ければ、これは説明しがたいものだと思います。

次に、日本統治時代の政策が台湾の喪葬儀礼に残した形跡として、一つ挙げられるのは、告別式というものがあるということです。

しかし、道教が伝えてきた儀式は、このようなことにまったく影響を受けておりません。なぜかと申しますと、道教の儀式というものは、親子間、もしくは師匠と弟子の間で継承されてきたもので、こうしたものに対して、政治の力はなかなか及びがたいわけです。

解除の儀式は、現在の台湾、それから台湾の田舎のあらゆるところで見かけることができます。華人社会で、最も自然な道教儀式が見られる場所は、これは台湾であろう、と私は考えています。私はかつてマレーシアで六年間の調査を行ったことがあるのですが、マレーシアの華人の間に残っている儀式は、台湾に保存されているものほど完全ではありませんでした。また、このような儀式を、今度は福建・広東など大陸の方に行って調査しますと、迷信として扱われ、継承が絶えてしまったことが分かります。五十年ほど断絶してしまっているわけです。

たとえば、解除の技法に、「除土」、つまり土を除くという儀式があるのですが、それと同時に「解土」という儀式があります。これは、道教の廟を建てる時に最初に行わなければならない儀式です。このような「除土」・「解土」の儀式というものは、王充の『論衡』の中に、すでに記載が見られます。もちろん、儀式の一部には、すでにいくつかの変化も見られるわけですが……。

それから、竹内先生が日本の解除縄である注連縄についてお教えくださったことに感謝したいと思います。竹内先生のお話によりますと、解除縄・注連縄は、結界と鎮めのはたらきがある。そのように理解いたしました。道教の注連の思想や儀式というものは、超自然的な力によって物事を解決するというものを保存してきております。私が今疑問に思っているのは、なぜ日本の社会で注連縄というものが保存され、漢人社会ではこれがなくなってしまったのかということです。

私が今回申し上げたいのは、後漢の時代にあらわれた「解注」という思想が、日本において現在にまで残っ

ている——、これはまさに文化におけるたいへんな生き残りでありまして、この点に非常に大きな驚きを感じております。このような、超越的な力・はたらきについての思想というものは、時空を超えて、民族を超えて、現代にまで残るのかと考えております。私個人といたしましては、いつか機会があれば日本に行つて、この注連縄の具体的な扱い方というものを、もう少し詳しく理解したいと考えております。

【謝世維】 さきほど張勳燎先生についてのお話が出ましたので、これについて簡単にお答えしたいと思います。

最近、張勳燎、それから白彬先生などから、天師道は東（洛陽）から西（長安）へと伝わったという説も提出されています。しかし、このような説は、いまのところ学会に受け入れられてはいません。さきほどの張勳燎先生の説も、まだ一般的なものではないわけです。

この問題は、道教をどのように定義するかという非常に複雑な問題にかかわってくるものだと考えております。

【蔡源林】 李先生と謝先生、たいへん詳しいお答えをありがとうございました。

【註釈】

『中国道教考古』は四川大学教授（但し出版時点）である張勳燎・白彬による全六冊に及ぶ浩瀚な論文集であり、出土資料から道教史を考えると、斬新な研究スタイルをとる。ここで議論しているのは、その中の第一論文であ

る「後漢時代の墓葬から出土した解注器と天師道の起源」についてであり、著者は従来、後漢時代後期（西暦一世紀末から二世紀にかけて）の鎮墓文と呼ばれてきた随葬器物（死者の冥福を祈るとともに、それが現世に戻ってこないように、生と死の断絶を宣言する文章を、小型の壺、もしくは鉛の札に記したものを。著者は解注器と呼ぶ）を、後の天師道の淵源となる初期の道教教団の産物であると考え、その教団を「初期天師道」と名づける。そして、初期の道教教団は元来、洛陽を中心とするエリアで、死者を祓う儀礼を行うことを主要な活動をしていたが、それが西方の長安や四川に伝えられ、四川に伝えられた一派が天師道という道教の中心になる教団に成長すると論じる（謝世継氏が「天師道は東（洛陽）から西（長安）へと伝わった」という説も提出されています。しかし、このような説はいまのところ学会に受け入れられてはいません」というのは、学界での定説は天師道は四川（西）で生まれ、洛陽（東）に伝わったということなので、『中国道教考古』が提出した仮説は台湾ではまだ受け入れられていない、ということである）。

張勳燎・白彬が鎮墓文を「初期天師道」の産物と考えた根拠は幾つかあるが、一つは鎮墓文においては死の穢れが「注」という概念で表わされ、幾つかの初期の道教経典（例えば『赤松子章曆』は死者の「注」を「解」（解除）する儀礼を詳述するという、儀礼の基本的構造の一致にある。本書の李豊楙論文では、『赤松子章曆』の初期性を否定し、また死者に関する道教儀礼（上章）は天師道よりも上清派の関与を示唆する点で、『中国道教考古』とは異なる立場に立っているが、道教学界では死者の穢れを祓う「解注」「解除」儀礼への関心が高まっていることは確かである。李氏の注連繩に関する言及もその点を踏まえたものであろう（「注」も「連」も、死者の穢れという意味を持つ）。

張勳燎・白彬が鎮墓文を「初期天師道」の産物と考えたもう一つの根拠は、李豊楙論文にも紹介されていたが、鎮墓文中に「道中人」という表現があり、それを「道教の信者」の意味と理解したということがある。李豊楙氏の答えにあるように、この点について台湾の道教研究者は概ね否定的であると言える。

『中国道教考古』の仮説に対しては、中国大陸でも様々な批判が出されたが、その中で最も鋭かったのが劉屹の批判である（但し、李豊楙氏は「劉屹先生の説というのはよく分からないのですが」と言っている）。台湾ではまだ十分に紹介されていないらしい。劉屹は、鎮墓文の時代区分を行った上で、道教的と言えないような特徴は後漢時

代には確立していないから、鎮墓文は初期道教教団の産物とは言えないとした。謝氏が言うように、この論争の中心になっているのは、道教的なるものをどのように定義するのか、という点にあるように思われる。(池澤優)